SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

情報学部文書管理システムの終了：グループウェア利用の一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 喜多野, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006558

情報学部文書管理システムの終了（グループウェア利用の一考察）

喜多野哲也
情報学部技術部

１．はじめに

情報学部では 2000 年度より電子掲示板として WebCentre(富士ゼロックス社)、文書管理システムとして DocuShare(富士ゼロックス社)を利用してきた。文書管理システムについて 2011 年の 6 月をもって運用を終えた。それを期に開始から終了に至るまでを総括しグループウェアのあり方を考えてみた。

２．導入から運用停止に至る経緯

2.1　導入

学長裁量経費により電子掲示板として WebCentre、文書管理システムとして DocuShare を 2000 年度よりペーパーレス、通知文書の自動連絡を目的として導入した。

2.2　運用経過

文書管理システムは 2001 年度より情報学部で運用を開始、2002 年度からは全学の事務組織でも運用を開始した。2004 年度からは工学部でも運用を開始しその後 2008 年サーバを分離し運用を工学部技術部に委ねた。2005 年度後期から教授会資料を紙による配布を廃しすべて電子化しペーパーレス会議となった。2006 年度セキュリティを考慮しプライベート IP(PIP)側にサーバを移し外部からのアクセスを排除した。2007 年度に入り利用が進まなかった事務部門の利用が完全に停止し工学部と情報学部のみの運用となった。サーバの老朽化によって 2008 年度ハードウェアと OS 更新を合わせて行った。それ以降トラブルなく運用してきた。2004 年度からのデータであるが文書管理システムと電子掲示板のアクセス量を図 1、図 2 に表した。見て判るように事務局からの利用がなくなってからの利用者は情報学部教職員が情報学部内と表示されネットワーク的に異なる情報学部の事務職員が情報学部外と表示されている。

2.3　システムの維持に関して販社からの申し入れ

2010 年 12 月販社の富士ゼロックス社から今後 DocuShare のバージョンを上げない限りク再インストールが必要な復旧やハードウェアの更新ができないとの連絡を受けた。急きょ今後どのように対処するか学部内委員会に諮り以下の 3 つの案を検討し費用対効果と実現に向けての技術検証を行った上で直接的な費用を伴わない(3)に選択がなされた。

(1) DocuShare のバージョンアップ　(V3.2.2 ⇒V6.5)
　約 265 万円(データ移行料含む)　　2 年目以降 46 万円/年 (年間使用料)

(2) 別のグループウェアに乗換え　例：サイボウズガルーン２(サイボウズ社)
　約 250 万円(データ移行料含まず)　2 年目以降 14.5 万円/年 (年間使用料)

(3)　DocuShare ⇒ Windows のファイル共有
　ハードウェアの費用⇒予備サーバで対応　データ移行⇒変換ツールを使い技術部で対応

2.4　移行作業

2010 年 12 月に連絡を受けてから各社の対処費用を出してもらうまでに約 2 カ月、実際の検証作

業を進めて行き決定を下したのが 2011 年 3 月下旬となった。4 月にサーバの準備を整え文書管理システムのファイルシステムの属性を利用者に確認してもらった。5 月に実施テストと利用者への案内を行い 6 月の上旬の 1 週間でデータの移行と属性とアクセス権を設定し 6 月の教授会の資料閲覧より新システムでの利用を開始し現在も問題なく運用している。

2.5　移行時の問題点

移行ツールとして DocuShare Client1.1 を利用したが移行に当たり以下の問題点があった。移行に際してのファイルおよびフォルダの属性設定やセキュリティの確保においての課題は技術部職員の応援を得て解決した。

(1)　フォルダ単位での移動がファイルの種類によって動作が停止する : 問題のあるフォルダ内のファイルを分割して移行

(2)　ファイル、フォルダのセキュリティレベルの変更手順の確立

(3)　Mac、Linux からのアクセスでショートカットが利用出来ない : エイリアスで対処

(4)　移行できないアプリケーションファイルのうちカレンダーツールのみ現状で残した : 2012 年 2 月 1 日学習ポートフォリオシステム付随のカレンダーツールにて運用開始予定

(5)　同一フォルダ内の同名ファイル : 作成日時の古い順に通し番号を付けて対処

(6)　ファイル属性の更新日は引継ぐがサブフォルダ属性の更新日を引き継がない : フォルダ内に移行前のサブフォルダ属性の更新日を記録したファイルを追加

2.6　電子掲示板について(補足)

電子掲示板は各部局にあるプリンタのスキャナと連動して紙文書を取り込み電子化や紙データの本部との通信の代わりに利用する予定で導入されたが、旧来の方式に慣れ利用の移行が進まないことや担当者の移動などにより業務の引継ぎがスムーズでなかったことにより便利な機能ではあったが利用者が減少し、今では情報学部学務係が大学院生の連絡で利用するのみとなった。サーバ自体も 10 年以上ハードウェアを変更することなく運用を続けてしたため今年度以降の維持管理を考慮し 2012 年 3 月末を持って利用を停止する運びとなった。

３．文書管理システムを通してグループウェアの利用で考えたこと

3.1　運用面での差

本来ソフトウェア利用のコンプライアンスを考えれば共有アカウントは問題あったが、予算的にアカウント数の限度があったため販社側で共有アカウントの利用を容認していた経緯があり、部局や本部係の係長や主任が複数で 1 つのアカウントを利用してきた。しかし、パイロットケースとして導入した情報学部ではひとり 1 アカウントを利用できるように 100 ユーザアカウントを得てほとんどの教職員が文書管理システムを利用できる環境にあった。また利用目的も会議室の予約、教授会資料を含めた委員会資料の登録・閲覧、出張報告書等フォーマット資料のダウンロードなど需要が多く頻繁に利用されていた。また担当教員が学生用として 50 ユーザのアカウントを別に用意していたため追加利用者にも対応できた。

この環境に違いから情報学部では利用が普及したが、事務局を主にした事務部門には他のグループウェアと異なり文書の安全保管を主目的とするグループウェアであったためその機能に重点が置かれ操作の習得に手間がかかり取っ付きが悪くユーザビリティに難があるシステムであった。そのため文書保存は利用している PC に保管する従来の形式を踏襲したままであった。また利用者をサポートする技術職員や事務職員が西部に偏っていたため、ただでさえ利用しにくいシステムがさ

らに利用を遠ざける形となった。

この更新に当たり各種グループウェアを改めて調査した。文書管理システム導入からすでに 10 年以上経っているためその間に多様なグループウェアが誕生し既存のグループウェアもバージョンアップで進化してきている。一例として以前はファイル管理で弱点があったサイボウズは、ファイル属性の管理を管理者のみに限定し利用者の不要な負荷を下げかつセキュリティの強化を図り、上位製品では検索機能を追加オプションで利用できるようにしてユーザビリティを損なわず機能の充実に努めている点は評価に値する。

3.2　環境の変化

2007 年事務組織がグループウェアとして文書管理システムの利用を停止した時点で内部的にサイボウズを部分的に導入していたので本部事務に普及を図った。それ以降次第に普及は進みつつあり、現在は事務組織全体に広がりをみせ今後全学で導入することを前提に動き出している。全学のネットワークシステムとしては､2010 年 3 月情報学部以外の本学の他の学部組織は情報基盤センターの管理下でネットワークを形成するようになった。事務組織も例外ではなく事務職員にはシンクライアント端末が支給されデータは端末側で保持せずクラウドサーバ側で管理し多様な通常利用できるアプリケーションソフトは利用できるようになり、セキュリティ面でもデータの安易な持ち出しを規制する仕組みに更新された。今後のシステム更新時には、サイボウズ ガルーン 2 や会計支援システムなど別運用であったサーバ類が全学のクラウドサーバへの移管が進み、シングルサインオン(SSO)によりアクセスがより容易になり利便性が増すことであろう。これは全学レベルで実施され情報学部も独自のネットワークを持ちながらも追随することが方向づけられるであろう。

４．ネットワーク環境下で望ましいグループウェアの条件

今回まとめたこととしてネットワーク環境下での望ましいグループウェアの条件を提示する。

(1)　誰でも視覚的に利用できるメインのポータルサイトとして利用可能なこと

(2)　メインのポータルサイトから目的別にグループウェアを選択できること

(3)　すべての利用者にアカウントを発給しシングルサインオン(SSO)でアクセスできること

(4)　保存したデータがアプリケーションソフトに依存し過ぎるシステムは問題がある。いつでもフォルダ単位で導入 OS のファイル形式に取り出せること(可用性)

(5)　目的を明確にして登録したユーザの大多数が使われるシステムであること

５．まとめ

導入してから 10 年以上経ち予算の関係でバージョンアップもままならない状態で文書管理システムのグループウェアを管理してきたが 2012 年 2 月から情報学部で稼働していた 2 台のサーバのソフトウェアが新システムで稼働する運びとなる。今後グループウェアを導入する際の指針として４章で提示した 5 つの条件を参考に選択がなされるとベターシステムが導入されるであろう。難はあっても使われないシステムよりも使われるシステムが良いシステムであると言える。メールツールのように使わざるを得ないツールのひとつとしてグループウェアが位置づけられるように組織として方向づけることが重要である。

過去 2002 年度、2006 年度と 2 回にわたりこのグループウェアに関して運用の経過を報告してきたが本記述をもって最終報告とする。

謝辞

本システム導入した富樫敦情報学部前教授(現宮城大学教授)はじめ導入・運用にご尽力頂いた皆様および新システム更新に尽力して頂いた本学部技術部スタッフに対してここに記し深く謝意を表します。

参考文献

[1] 喜多野哲也：「情報掲示システムと文書管理システムの紹介と運用管理」 静岡大学技術部 技術報告 第 8 号（2002）， p27,28

[2] 喜多野哲也、高柳正勝：「電子掲示板と電子文書管理システム導入の 6 年間」 静岡大学技術部技術報告第 12 号（2006）， p5-8

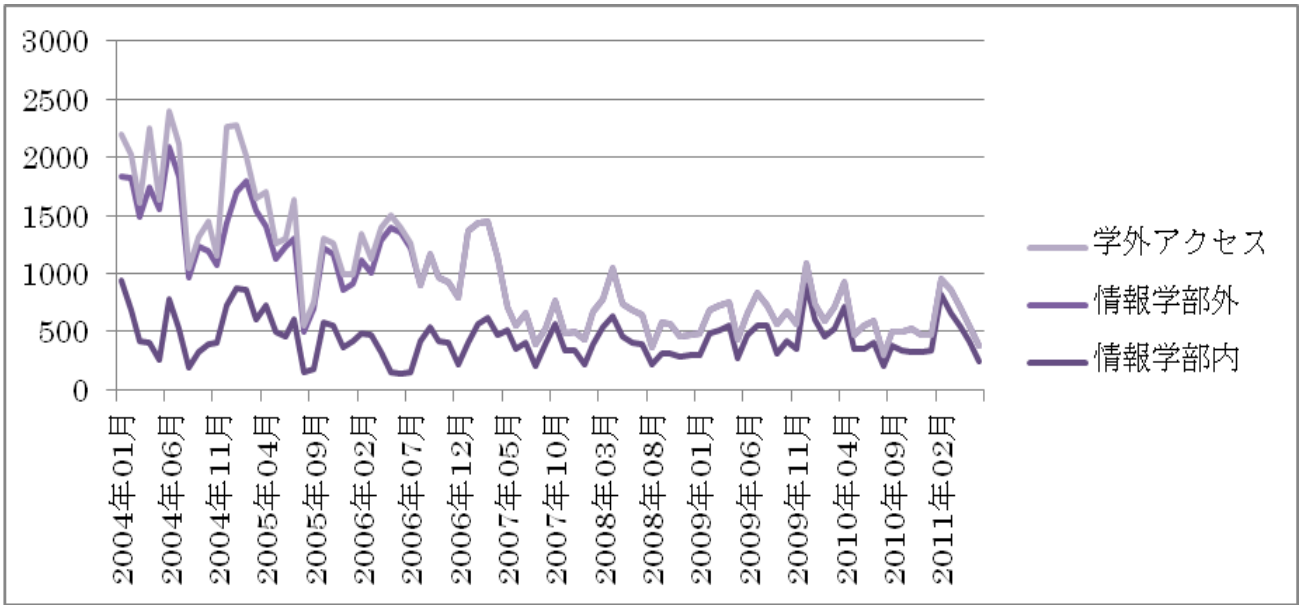

図 1. 文書管理システムへのアクセス量(2004 年 1 月～2011 年 6 月)

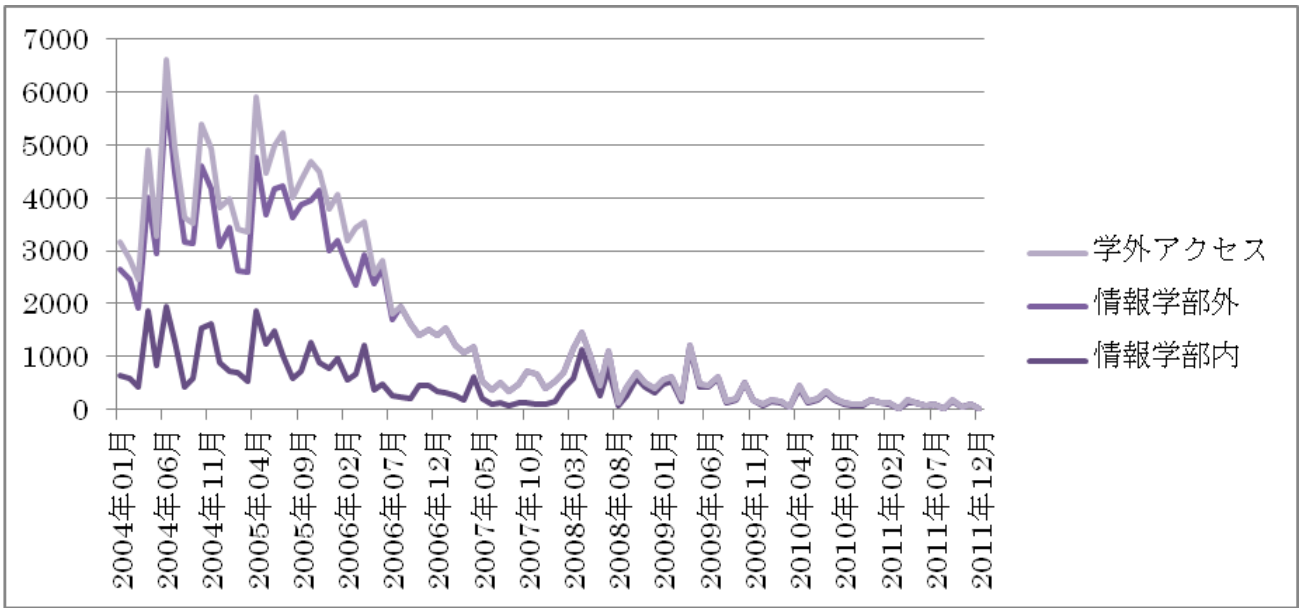

図 2. 電子掲示板へのアクセス量(2004 年 1 月～2011 年 12 月)